

〈総合的な学習の時間〉

主体的に課題に取り組み、地域に関わる児童の育成

—— 地域素材を活かし、他者と協働的に学習する場の工夫を通して（第3学年） ——

嘉手納町立嘉手納小学校 金城睦治

I テーマ設定の理由

地域社会には、その地域ならではのよさがあり、それを誇りに思い、大切にし、継承してきた。一方で、急激に変化する現代社会において、少子化や核家族化、都市化、生活様式の多様化等により、地域における地縁的なつながりの希薄化といった切実な問題も生まれている。地域への理解や関わりが低下した背景を受け、地域の未来を担う子供たちへの期待は、これから増々高くなるといえる。

嘉手納町では、新たに教育目標を「嘉手納町を愛し 心豊かに力強く生き抜く子 学び続ける町民を育む」と制定した。そこで追記された文言、「嘉手納町を愛し」とは、「嘉手納の良さ・特色を知り、語る、好きになり、誇りに思うこと」と説明している。総合的な学習の時間においては「日常生活や社会とのかかわりの重視」という文言を、「新学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」（以下、「新解説総合編」と略す）の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」から「第2 各学校において定める目標及び内容」へ移行するなど、地域社会との関わり的重要性をより明確にした。また、三田大樹(2017)は、「総合的な学習の時間で地域や学校の特色に応じた探究活動を設定することは、子供が地域のよさや問題に改めて気づき、地域を自分事として捉え直す機会を与える」としている。

昨年度から、本校においても地域の良さに気づき、誇りを持たせようと、様々な行事等で「町歌」を斉唱している。町歌の歌詞には、本町の良さ、特色が存分に込められているが、やはりその実践だけでは地域への興味・関心は高まらない。また、本町で行われる様々な地域行事やイベントへの児童の参加率の低さからしても、積極的な関わりが弱いと推察される。さらに、社会科で地域学習を行った3年生に「嘉手納町の自慢は？」と尋ねると、目に見える事象（公共施設や偉人、イベント等）は捉えることができているが、目に見えない事象（そのよさや目的、携わる人々の努力や願い等）までは、学びを深めることができていない。

私自身のこれまで実践してきた総合的な学習の時間を振り返ってみると、限られた時間内ですべての児童が学習のめあてを達成できるよう、必要以上に指示を与え、誘導的に導くことが多かった。その結果、他者と協働しながら課題を追求する機会がほとんどなく、達成感・充実感を味わせた一方、探究のプロセスの中で育む主体的な態度の育成に課題があった。

これらの課題を、以下に示す二つの手立てを講じ解決へと導きたい。一つ目に、地域の自慢に携わる素材へ触れさせることで、地域への興味・関心を高めさせたい。その際、地域に対する努力や願いを共有させることで、様々な疑問や興味が生まれ、自分事として課題を設定することができるであろう。また、人との繋がりを意識した課題設定を考えさせることで、より地域に関わろうとするのではないかと考える。二つ目に、他者と協働的に学習を進める場において、「考えるための技法」を積極的に活用し、子供の主体性につなげる工夫を行う。その結果、多様な情報、異なる視点に触れ、学びが深まり、学習パートナーとしての仲間意識が生まれ、課題解決に向け主体的な態度と、地域に関わり調べようとする姿が育成されたいと考える。

そこで本研究では、「地域素材を活かす」とことと、「協働的に学習する場を工夫」することで、主体的に課題に取り組み、学びを深め、自ら進んで地域に関わる力が身につくのではないかと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

総合的な学習の時間における「嘉手納の自まん 発見プロジェクト」の学習を通して、地域の素材を活かし、他者と協働的に学習する場を工夫することにより、主体的に課題に取り組み、地域に関

わる児童を育成することができるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 主体的に課題に取り組み、地域に関わる児童について

平成10年告示の学習指導要領では、新設された総合的な学習の時間のねらいを「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる」と明示している。「自ら」や「主体的」といった言葉からも分かるように、総合的な学習の時間では、当時から児童主体の学習が求められていたと読み取ることができる。

児童は本来、知的好奇心が旺盛で、興味ある課題に対しては納得いくまで追求していく姿を、これまでの実践を通して目の当たりにしてきた。したがって、児童の主体的な取り組みを重視しなければならない。ただし、児童の主体性を重視するといっても、それは教師が学習に対して積極的に関わらないということではなく、学習活動が深い学びになるよう適切な指導が求められると考える。「新解説総合編」によれば、「どのような体験活動を仕組み、どのような話し合いを行い、どのように考えを整理し、どのようにして表現し発信していくかなどは、まさに教師の指導にかかる部分であり、児童の学習を活性化させ、発展させるためには欠かせない」と示している。そういった教師の指導力と、児童の主体性のバランスを保ちながら、それぞれを適切に位置付けることで、豊かで質の高い総合的な学習の時間を生み出すことにつながるとしている。つまり、児童の主体性が発揮されている場面では、児童の変容を見守り、児童の取り組みが停滞したり迷ったりしている場面では、適切な指導を行うことで、豊かで質の高い学習を生み出すことになる。

主体的に課題に取り組む指導として、田村学（2017）は、授業の導入における課題設定を挙げている。「子供は、実生活や実社会とつながりのある具体的な活動や体験を行うことによって意欲的で前向きな姿勢をとる」とし、「そのためにもリアリティのあるクオリティの高い課題設定が欠かせない」としている。そして、「対象に直接触れる豊かな体験活動が、意味ある課題を生み出すために重要であり、そのことが、その後の息の長い探究活動の原動力となる」と述べている。また、「新解説総合編」においては、児童が主体的に学んでいく上で課題設定と振り返りが重要となるとし、「学習活動の見通しを明らかにし、学習活動のゴールとそこに至るまでの道筋を鮮明に描くことができるような学習活動の設定を行うことも大切」としている。振り返りにおいては、「自らの学びを意味付けたり、価値付けたりして自覚し、他者と共有したりしていくことにつながる」とし、必ずしも単元の最後に行うとは限らないとしている。というのも、「時には探究の過程において、途中で一旦立ち止まって振り返って考え直してみるということも、主体的な学びという視点からは意義がある」と示しているからである。

また、今回の学習指導要領の改定で、「日常生活や社会との関わりの重視」が「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」から「第2 各学校において定める目標及び内容」へと移行されたことで、児童が地域に関わる取り組みの重要性がより明確になったといえる。

四カ所清隆（2017）によると、日常生活や社会との関わりを重視する学習の意義について、リアリティのある課題を取り上げることで、児童は課題をなんとか解決しようと真剣に取り組むとし、その探究過程で育成された資質・能力は、いずれ実社会・実生活の中でも重量な役割を果たしていくと述べている。また、「日常生活や社会に関わる課題は、自分とのつながりが明らかであり、生涯にわたり学んでいこうとする主体性を育むことができる」と述べている。さらには、地域に関わる学習課題においては、地域の様々な人との関わりが考えられ、そうした学習活動では「自分の力で解決することができた」「自分が学習したことが地域の役に立った」などの課題の解決に取り組んだことへの自信や自尊感情が育まれると述べている。

よって本研究では、「主体的に課題に取り組む」「地域に関わる」という児童の姿に焦点を当て、「地域の自慢」を探究課題として進めていく。その際、探究の前半部分（課題設定）におい

て「地域に興味・関心を抱き、自ら課題を設定し、課題解決に向けて地域に関わろうとする児童の姿」を目指し研究を行う。具体的な手立てとして、一つ目に地域素材の活用で興味・関心、主体性を引き出し、地域の人との繋がりを意識したリアリティのある課題設定に繋げること。二つ目に考えるための技法の活用により、学習の質を高め、主体的に地域に関わり調べようとする姿を育む指導をする。以上の2つの指導の側面から検証を進めていく。

2 地域素材の活用

「新解説総合編」では、「総合的な学習の時間では、地域の素材や地域の学習環境を積極的に活用することが期待されている」と示しており、そのためにも外部の協力が欠かせないと記述されている。また、鈴木登美代（2017）は、各地域にはそれぞれのよさや特徴、長年住み続けている人々など多くの素材や人材が存在し、それらを活用しながら探究課題を設定していくことが望ましいとしている。そして「地域と一体となって取り組むことで地域への親愛や愛情が膨らみ、地域への誇りが培われ『ふるさと』として意識するようになる」と述べている。

このようなことから、地域素材を活用し児童の興味・関心を高め、自ら調べたいと主体性を引き出し、探究の入り口に導いてあげることが、深い学びの原動力となると考える。そして、児童が地域と一体となって取り組み、課題が解決できたとき、最終的に地域への親愛や愛情、誇りに繋がるのではないかと考える。繋ぐうえで大切なのが、探究の課題の方向性を捉えたりする「地域素材の活用の仕方」である。「新解説総合編」では、外部連携のための留意点として、右側のように示している（図1）。本研究においては、その中から「(4) 適切な打合せの実施」に重きを置き、地域素材を活用していく。

- (1) 日常的な関わり
- (2) 担当者や組織の設置
- (3) 教育資源のリスト
- (4) 適切な打合せの実施**
- (5) 学習成果の発信

図1 外部連携のための留意点

外部人材を講師として活用するにあたっては、講話の内容が学び取る余地がないほど詳細であったり、難しすぎて理解できなかったりということがないよう、注意を払わなければならない。よって、事前に児童の実態や、単元のねらい、教師が外部人材に何について話をしてもらいたいかなどを伝えておくなどの適切な打合せの実施を行う。また、授業当日も外部人材に任せたまの授業にならないよう、お互いの役割分担を明確にする。それでも講話の内容が難しいと感じる場合は、状況に応じて教師が説明を補う。

地域素材活用の具体的手立てとしては、単元の導入部分において、ゲストティーチャーを招き、地域への興味・関心を高めさせたい。その際、図2のように多種多様な人材を選び、メッセージ性をもたせた講話をしてもらう。

地域素材の活用を指導する際のキーワードは「人との繋がり」であり、最初は教師が意図的に教材を提示し繋がりを作る。そして、探究の過程においては、主として児童が積極的に地域との繋がりを調べていく。学習に行き詰まったりしたときに、適切にヒントを与え、繋がりを支援する。

本研究においては、人との繋がりを通して、児童自ら課題を設定し、主体的に学習の見通しを立て課題解決に向けて学習活動を行えるよう導いていきたい。そして、学習に協力してくださった方々に、学習の成果を伝える場を設け、連携や協力の成果を共に共有したい。そうすることで、単元の最終ゴールの姿、いわゆる子供が地域の人々と親密になり、地域に関心をもち、地域行事やイベントに参加したりするといった、自ら社会に関わり参画する意思が高まると考える。本研究では、課題設定の指導の際にも教師が社会に関わり参画する児童を学習の最終の姿として見据える指導をし、また、児童にも学習の目的を常に確認しながら、学習過

- 1 町長、商工会職員、役場職員 等
地域発展に向けて、現在力を入れて取り組んでいるプロジェクトを紹介してもらう。
- 2 本町出身者
なぜ地元の素材にこだわり活動しているのか、地元に対する思いを伝えてもらう。
- 3 町外出身者
町外から見た本町の良さや自慢、本町を拠点に活動している理由を伝えてもらう。

図2 地域の外部人材の活用目的

程やその成果が繋がっていくよう指導していく。

3 他者との協働的な学習

田村学（2017）は、これからの時代、子供たちに求められている力として「協働的な問題解決力」を挙げている。同氏は、「自分一人ではなかなかうまくいかないことや、できそうにないことが、仲間と一緒に取り組んだからこそ上手にでき、これほどの成就感を味わえたという思いと、その中で、自分なりに力を発揮して役に立てたという実感をもたせたい」と、他者との協働的な学習のよさを説いている。

また、「新解説総合編」の第7章 第3節によると、「総合的な学習の時間においては、特に、異なる多様な他者と協働して主体的に課題を解決しようとする学習活動を重視する必要がある」と示している。その理由として「協働的に学ぶことにより、探究的な学習として、児童の学習の質を高めることにつながるから」としている。そして、協働的に学ぶことの意義として、一つ目は、多様な情報にふれること。二つ目は、異なる視点から検討ができること。三つ目は、相手意識を生み出したり、学習活動のパートナーとしての仲間意識を生み出したりすること。以上の3つを協働的に学ぶことの意義として挙げている（図3）。

- | | |
|---|------------------|
| 1 | 多様な情報にふれることができる。 |
| 2 | 異なる視点から検討ができる。 |
| 3 | 相手意識、仲間意識を生み出す。 |

図3 協働的に学ぶことの意義

協働的な学習を通して学習の質を高めるためには、

児童の積極的な姿勢が不可欠であり、そのためにも主体性を引き出すことが重要となる。

そこで、本研究では、他者と協働して問題を解決する際、児童の主体性を引き出し、学習の質を高めていけるよう「考えるための技法」の活用を通して検証する。考えるための技法とは、「新解説総合編」において「考える際に必要になる情報の処理方法を、『比較する』、『分類する』、『関連付ける』のように具体化し、技法として整理したもの」と示している。

具体的手立てとして、図4の3つの技法を活用する。

- | | |
|---|--|
| 1 | フォトランゲージ（導入場面）
地域の自慢に携わる人材、素材に興味・関心を持たせる。 |
| 2 | ウェビング（学習テーマ設定場面）
中心テーマから細分化し、具体的に捉えさせ、学習課題を見出させる。 |
| 3 | KJ法（課題設定場面）
調べたいことを類型化し、調べたい項目を見出させる。 |

図4 考える技法の紹介

フォトランゲージとは、提示された資料（写真）をよく観察し、背景となっている状況に共感したり、その資料に込められた意味を探り出したりして、参加者相互で自らの気づきや発見を分かちあう学習活動である。本研究では、導入の場において活用し、嘉手納の自慢に携わる方の仕事内容、地域に対する想いを共感し、地域への興味・関心を高めていく。

ウェビングとは、キーワードとなる言葉からイメージするものを繋げていく学習活動である。本研究では、学習テーマの設定場面において活用し、テーマを多面的にとらえさせたり、細分化して具体的にとらえさせたりして、学習テーマを設定させる。

KJ法とは、収集した多量の情報を効率よく整理するための手法である。考案者の川喜田二郎氏の頭文字から命名された。KJ法は収集した情報をカード化し、同じ系統のものでグループ化することで情報の整理と分析を行う。本研究では、課題設定の場面において、調べたいことが多様に出て学習課題を設定できなかったり、多様すぎて中心テーマからズレが生じたりした際に活用し、話し合いを通して課題を明らかにさせていく。

Ⅲ 指導の実際

1 単元名「嘉手納の自まん 発見プロジェクト」

2 単元目標

自分たちの住んでいる嘉手納町の自慢について、聞いたり、調査したり、模造紙にまとめたりして調べることによって、地域の特徴や、そこに住む人々の生活について理解を深めるとともに、

嘉手納町の良さを感じることができる。

3 単元の評価規準

	評 価 規 準
知識及び技能	①地域の良さや、地域の発展に携わる人々の思いを知る。 ②考える技法の仕方が分かる。
思考力、判断力、表現力等	①情報を収集したり、選択したり、整理している。 ②様々な考えや意見をもとに、思考を深めることができる。 ③調べたことを、相手に応じて、表現方法を工夫し発信することができる。
学びに向かう力、人間性等	①仲間と協力して話し合ったり、活動したりしている。 ②地域の一員として町を大切にしていきたいという思いを持つことができる。

4 課題設定までの単元計画（10時間）

過程	学習内容・ねらい	地域素材の活用 (目的)	他者と協働的に 学習する場の工夫 ★考えるための技法	評価観点及び 評価方法
課 題 設 定	1 オリエンテーション ・嘉手納町の自慢（ひと、もの、こと）を紹介する。 ・単元の見通しや身に付けたい力を知る。	ひと、もの、ことに関する写真 (自慢に関するカテゴリーを紹介)	嘉手納の自慢クイズ (ひと、もの、ことの視点を理解する)	【知・技】① 発言、ワークシート
	2 嘉手納の自慢に携わる方の話を聞こう ・嘉手納町の自慢に携わる方の思いを知る。 ゲストティーチャー：グルクンマスクさん (琉球ドラゴンプロレス)	町外出身者 (町外出身者から見た嘉手納の自慢、良さを紹介)	講話 (学習課題に関する興味・関心、思考を広げる)	【知・技】① ワークシート
	3 嘉手納の自慢に携わる町民の活躍を知ろう ・地域素材（野國芋、比謝川）を活用し、嘉手納の自慢に携わる町民を紹介。 Aさん（コーヒー屋）Iさん（カヤック案内人）	本町出身者 (地域素材の良さ、地域に対する想いを紹介)	★フォトランゲージ (主体性を引き出し、思考を広げる)	【知・技】① 【思・判・表】② 作成図 ワークシート
	4 学習テーマを設定しよう ・中心テーマ（人、もの、こと）からウェビングで細分化し、具体的に捉えさせ課題を見出す。	商工会発行冊子 「嘉手納のススメ」 (学習課題を見出す)	★ウェビング (主体性を引き出し、思考を広げる)	【知・技】② 【思・判・表】② 作成図 ワークシート
	5 学習計画を立てよう ・調べたいことを決める。	商工会発行冊子 「嘉手納のススメ」 (学習課題を見出す)	★ウェビング (主体性を引き出し、思考を広げる)	【思・判・表】① 発言、ワークシート
	6 調べてみよう ・予備知識をつける。 (本、インターネット、資料等)	商工会発行冊子 「嘉手納のススメ」 (情報を収集)	調べ学習 (新たな疑問、気づきを引き出さす)	【思・判・表】① 【学び・人間】① ワークシート
	7 振り返ろう ・学習課題がこれで良いかどうかを振り返り、構築を図る。		★ウェビング (主体性を引き出し、思考を広げる)	【思・判・表】② 作成図 発言、ワークシート
	8 調べたい項目を考えよう ・調べたいことを付箋紙に書き、付箋紙を類型化する。		★KJ法 (主体性を引き出し、学習課題を見出す)	【学び・人間】① 発言、ワークシート
	9 調べたい項目を決めよう ・類型化した付箋紙にタイトルをつけ、調べたい項目をはっきりさせる。		★KJ法 (主体性を引き出し、学習課題を見出す)	【知・技】② 【思・判・表】② 作成図 発言、ワークシート
	10 校外学習に向けての約束事 ・校外学習に向けての安全指導、計画表の作成について指導する。		校外学習計画 (課題解決に向けて、解決方法を見出す)	【学び・人間】① 発言、ワークシート

5 本時の指導（4／10）

- 本時のめあて 嘉手納町の自慢について、学習テーマ（課題）を設定する。
- 授業仮説 学習テーマを決める場において、ウェビング法で思考を広め、分類、比較した中から具体的に捉えさせることで、学習テーマを見出すことができるであろう。

(3) 指導過程

	学習活動	◆指導上の留意点 他者と協働的に学習する場の工夫	◇評価 ・評価方法
つかむ 10分	1. 本時のめあてを確認する。 ウェビングを使って 学習テーマを決めることができる。 2. ウェビングのやり方を説明する。	◆『ウェビング達人への道』と題して、ルールを確認する。 ① 1本の長い団子より、たくさんの短い団子（放射状につなぐ） ② 内容よりも数（質より量） ③ 批判しない ④ 順番を決め、一人1つずつ発表する	
深める 30分	3. ウェビングでイメージを広げて、学習テーマを設定する。 ① 中心テーマを決める ② ウェビングでイメージを広げる ③ 完成したウェビングを分析する ・ 関連のある内容を線でつなぐ ・ 重要だと思う内容に印をつける ④ 調べたいテーマを設定する 	各グループでウェビングを実施する。 ◆大きく広がりすぎないように、中心テーマを「ひと」「もの」「こと」のいずれかを選択させる。 ◆ウェビングが広がらないグループは、「嘉手納のスズメ」（商工会発行）を活用させ、イメージを広げさせる。 ◆決まった学習テーマが地域の自慢にふさわしいか確認させる。 「他の市町村に、同様のものはないか？」 決まった学習テーマをホワイトボードに書き込み、全体場で発表する。	◇ウェビングの図を使い、思考を広げることができる。 【思・判・表】② ・ウェビング図 ・観察
まとめる 5分	5. 本時を振り返る。 6. 次時の学習を知らせる。	早く書き終えた児童は、隣のペアへ（またはグループ内で）発表する。	

6 仮説の検証

研究仮説に基づいて、地域素材を活かし、他者と協働的に学習する場の工夫を通して、「主体的に課題に取り組み、地域に関わる児童の育成」ができたかについて、授業の観察、ワークシートへの記述、制作物、検証授業前後のアンケート調査や学習感想等の分析を基に行っていく。

(1) 地域素材の活用について

① 教材提示の工夫

本研究においては、地域素材との繋がりを狙った教材提示の工夫として、ゲストティーチャーを招聘する直接的な繋がりと、写真や担任を通して繋ぐ間接的な繋がりの二通りの教材提示を単元の導入時に設定した（表1）。直接的な繋がりの教材提示として、第2時目にゲストティーチ

表1 地域素材の活用

地域素材の活用	提示方法	意図	目指す児童の姿
嘉手納の自慢に携わる 町外出身者	講話 (直接的な繋がり)	町外出身者から見た本町の良さや自慢、本町を拠点に活動をしている理由を知る。	地域に対し、興味・関心を高め、地域の自慢の思考を広げる。
ひと(人物、偉人等) もの(店、施設等) こと(祭り、イベント)	写真クイズ (間接的な繋がり)	嘉手納の自慢の視野を広げる。	地域に対し、興味・関心を高め、自慢の視点を知る。
嘉手納の自慢に携わる 本町出身者	フォトランゲージ (間接的な繋がり)	地域素材を活かし、地域を活性化させたいという想いを知る。	地域素材に対し、愛着を持ち、協働的な学習を通して主体性を引き出す。

ヤー（町外出身者）による講話を行った。その際、町外出身者から見た本町の良さ、自慢を講話してもらうことで、図5のように、実は地域のよさを知っていないことを認識させ、調べてみたいと主体性を引き出すことができた。また、間接的な繋がり教材提示として、第1時目に嘉手納の自慢に関する写真クイズ、第3時目に嘉手納の自慢に携わる本町出身者をフォトランゲージで取り上げ、指導を行った。

第1時目の写真クイズでは、「ひと、もの、こと」の3つのテーマから写真の一部分のみを提示し、クイズ形式で、説明を交えながら嘉手納の自慢を紹介した。その結果、普段何気に通っていた町内の施設やお店、イベントが自慢であることに驚き、地域に対し興味・関心を高め、嘉手納の自慢に関する視野を広げることができた（図6）。

また、第3時目には、招聘できなかった嘉手納の自慢に携わる本町出身者二人を、フォトランゲージの中で取り上げ、指導を行った。地域素材（野國芋、比謝川）を活かし、地域を活性化させたいという想いを共感させたことで、次時の課題設定の意欲付けへと繋げることができた。

② 適切な打合せの実施

「新解説総合編」で記載されているように、地域人材を活用する際には、適切な対応を心掛けるとともに、授業のねらいを明確にし、双方の役割分担を事前に行うことなどの十分な打合わせを行う必要がある。本研究においては、講話を実施するにあたり、講話の内容が難しく理解しづらいということがないよう、図7の目的のもと、事前に打合せを行った。その際、図8の内容を共通確認し、お互いの役割分担を明確にすることで、学習の効果を最大限に高める工夫を行った。その結果、児童の感想から地域の自慢に対する興味・関心の高まりがみられた（図5）。

このように、地域素材の見せ方を工夫したことで、嘉手納の自慢に関する視野を広げ、調べてみたいという主体性を引き出すことができた。そして、地域人材との適切な打合せの実施により、児童の興味・関心を最大限に引きだし、探究の入り口に導き、同時に地域に関わろうとする態度を育成できたと考える。

(2) 他者と協働的に学習する場を工夫

本研究では、他者と協働して問題を解決する場面において、「考えるための技法」を積極的に活用し、検証を行った。

① フォトランゲージを活用した実践

フォトランゲージは、嘉手納の自慢に携わる本町出身者の仕事内容、地域に対する想いに気づかせる場面において、ものごとを多様に捉え、興味・関心を引き出すことを目的とし、第3時目に活用した。地域素材（道の駅、比謝川）が写し出された1枚の写真から、様々な事象を読み解かす前に、「質より量」「思ったことをすぐ書く」「批判しない」と約束事を確認した。それにより、全児童が伸び伸びと気づきや発見を書き込むことができ、主体的に多面的・多角的

第2時目 講話の振り返り

- A 児「自分たちのすんでいるところは、自まんで
きる町なんだということがわかった。」
B 児「かでな町に、こんなゆう名な人がいたなん
てはじめて知った。」
C 児「グルクンマスクいがいのプロレスラーも
調べてみたいです。」

図5 児童の感想

第1時目 授業の振り返り

- D 児「たくさんかでなのじまんがわかって楽しか
った。もっと、しりたいと思った。」
E 児「先生が『うたの日コンサート』は、じま
んと言っていたので、びっくりしました。」
F 児「かでなのじまは、いったいくつあるの
かしらべてみたくなりました。」

図6 児童の感想

- ① 児童の興味・関心を最大限に引き出す。
② 知っていることの視野を広げる。
③ 学習に向かう力の原動力に結び付ける。

図7 打合せの目的

打合せで共有したこと

- ① 児童の実態
・ 学級や学年全体の傾向を共有し、当該学年が理解できる内容にしてもらった。
② 単元、授業のねらい
・ 単元を通して、どのような資質、能力を育成するのかを共有し、それに見合った講話をお願いする。意図的に話してほしい内容を、講話の最後に結びつけてもらった。
③ その他
・ 授業の流れ、時間配分、講話に必要なもの（パソコン、マイク等）を確認し、児童がしっかり聞いて考えるための工夫を行った。

図8 適切な打合せの実施

な視点から探そうする態度に繋がった。このように協働的に学習を行った結果、こいのぼりの飾りから季節を5月と予想したり（気づき）、場所の賑わいから時間帯を考えたり（想像）と、教材に関する興味・関心や、思考の広がりが得られた（図9）。

② ウェビングを活用した実践

ウェビングは、学習テーマや調べたい内容を見出す場面において、イメージを広げ、テーマを多面的に捉えたり、細分化して具体的に捉えたりしながら学習テーマを見出すことを目的とし、第4、5、7時目に活用した。

まず第4時目では、中心テーマ（ひと、もの、こと）からイメージを広げ、細分化して学習テーマを捉えさせた。フォトランゲージ同様、作業前に「団子状ではなく放射状」「質より量」「批判しない」の約束事を確認した。また、全員が発言できるよう、グループ内で発表順を決めさせ、発言は一人1つずつとした。その結果、一人ひとりが主体的に関わり、他者と協力して思考を広げ、それを視覚化することで、学習テーマを決めることができた（図10）。そ

して、第5時目では、学習テーマからさらにウェビングでイメージを広げ、調べたいことを見出させたが、ウェビングが広がりすぎて、調べたいことと学習テーマが一致しないグループや、地域の自慢に繋がらないグループがあった。原因としては、その内容が学習テーマとどのような関係にあるのかを十分に話し合わせる時間を設けていなかったことが、原因として考えられる。そこで、第7時目では前時までの振り返りを行った。「他者に発信したい内容が嘉手納の自慢に繋がっているか」と視点を与えたことで、自分たちの学習課題のズレに気づくことができた。その後、再度ウェビングでイメージを広げ、学習課題の細分化を図った。

ウェビングの活用を通して、他者からの多様な情報や異なる視点からの検討により、少しずつ思考を広げられるようになった。これは、一人ではなかなかうまくいかない児童にとって有効的な学習となり、協働的な学習の良さを実感したことで、仲間意識を生み出し、意欲的に学習に参加する主体性を引き出すことができた。

③ KJ法を活用した実践

KJ法は、学習課題を決定する場面において、調べたいことを類型化し、分析しながら学習課題を見出すことを目的とし、第8、9時目に活用した。

第8時目では、調べ学習（第6時目）を通して生まれた気づきや疑問、ウェビング（第7時目）から出てきた調べたいことを、思い思いに付箋紙に書き込み、次時に繋いだ。そして第9時目では、関連性のある内容を一まとめにし、類型化を図ったが、3年生にとっては難しい作業といえる。そこで、類型化するコツとして、キーワードの言葉を設けるとまとめやすくなることを伝えたことで、自分たちでキーワードを見つけながら類型化することができた。そして学習課題を決める際には、「みんながまだ知らない情報であること。そして、それを第三者が知ること、学習テーマに興味・関心が高まる情報が、学習課題として相応しい」と、学習の目的を再認識させた。その結果、地域の自慢に繋がらない学習課題を挙げていたグループが、類型化した表を活用しながら意見を出し合い、地域の自慢に繋がる学習課題を見出すことができた（図11）。KJ法の活用により、学習課題を決定することはできたが、フォトランゲージやウェビングのように直感でどんどん書き進める技法ではなく、考え分析しながら進めていく技



図9 フォトランゲージ



図10 ウェビング図

法ということもあり、時間配分や指示の出し方に対して、いくつか課題も見られた。本研究においては、2時間かけてKJ法を活用し、自分たちが本当に調べたいリアリティのある学習課題を決定できたことで、主体的に地域に関わる姿の育成ができたと考える。

④ アンケートによる検証

他者との協働的な学習に関するアンケート調査では、「他人の意見や考えを聞きながら進めていくグループ学習は好き」と答えた児童が87%いた（表2）。好きな理由として、「みんなと考えると思いつくのがいっぱいあるから」「自分とは違う考えを聞けるから」「一人だったら、こんな計画をたてられないから」等からも、他者との協働的な学習によって学習の質が高まった結果、グループ学習に対して好意的に捉えていると推察できる。このことは、仲間と一緒に協働的に取り組んだことで、主体性が引き出され、一人では難しく整理がつかない考えも多様な情報に触れ、様々な視点から検討した結果、学習の目的を達成し、協働的な学習の良さを味わうことができたからだと考えられる。

以上のことから、他者と協働的に学習する場の工夫として、考えるための技法を活用することは、自分たちで主体的に学習テーマを見つけ、地域に関わる具体的な調べたい内容や学習計画を立てることができ、主体的に地域に関わり調べようとする姿の育成に繋がったと思われる。

(3) 主体的に課題に取り組み、地域に関わることができたか

① 人との繋がりを意識した学習課題の設定

本研究では、人との繋がりを通して、児童自ら課題を設定し、主体的に学習の見通しを立て課題解決に向けて学習活動を行うことを目指した。

第8～9時目の課題設定の場面において、「インターネットや資料だけで調べられる学習課題ではなく、実際に出向き、見たり、聞いたりすることでしか分からないことを調べよう」と、人との繋がりを意識した課題設定を図った。その結果、課題解決に向け、インタビューや現地調査、見学等の学習計画を立て、地域に関わろうとする姿が見受けられた（図12）。

以上のことから、人との繋がりを意識したリアリティのある学習課題が、探究活動の原動力となり、主体的に課題に取り組み、地域に関わる児童の育成に繋がったと考える。

② 児童のアンケートによる検証

検証前後にアンケートを行った。図13と図14は、その結果である。今回のアンケートでは、「好き」「どちらかといえば好き」を肯定的な回答、「どちらかといえば嫌い」「嫌い」を否定的な回答と捉える。まず、図13の質問1「興味や疑問に思ったことを、自分で調べて進めていく学習は好きですか」に対しては、肯定的な回答が、検証前の55%から検証後には75%と、20ポイント上昇した。また、検証授業後には「みんなと協力して課題設定までいけたからよかったです」「グルクンマスクさんが嘉手納の自慢で紹介していたハンバーガーがある店にも行って、調べてみる」「みんなの意見がいっぱいあって楽しい」等の感想があった。これは、地域素材の

第5時目を終えて

学習テーマ「道の駅かでな」（3グループ）
調べたいこと

- ・野國芋ソフトクリームはおいしいのか。
- ・A店で働いている人は何人いるのか。
- ・店員Bさんは何歳か。
- ・C店はもうかっているのか。
- ・ここで働いて楽しいか。等



第9時目の終えて

調べたいこと

- ・他の道の駅にはない、道の駅かでなのよき
- ・道の駅かでなで開催するイベント
- ・よく売れているおみやげ
- ・よく売れている食べ物
- ・A店のおすすめの商品 等

図11 調べたい内容の変容

表2 協働的な学習に関するアンケート

他人の意見や考えを聞きながら進めていく
グループ学習は好きですか？ n=31

好き	21人	87%
どちらかといえば好き	6人	
どちらかといえば嫌い	2人	6.5%
嫌い	0人	
分からない	2人	6.5%

第9時目 授業の振り返り

G 児「しらべるこう目を8つ考えました。早く調べに行きたいです。」

H 児「〇〇さんにインタビューをして、のぐにいいところを、たくさんの人に広めたいです。」

図12 児童の感想

活用を通して調べたいという興味・関心を引き出し、他者との協働的な学習を通して学習の質を高め、学びの楽しさを感じることができたからだと推察される。つまり、これらの結果から、地域素材を活かし、他者との協働的な学習の場面を工夫したことで、主体的に課題に取り組み、地域に関わる児童の育成に繋がったと考える。

次に、図 14 の質問 2「町外の人達に、紹介したくなるような嘉手納町で自慢できるものはありますか」に対しては、あると回答した児童が、検証前後で 13 ポイントの上昇と、大きな変容は見られなかったが、これは現段階においては現地調査前で新たな知識に触れていないからだと考えられる。

一方で、その質問の記述回答を分析してみると、検証前は 12 名の児童が、家族や親せき、友人、自分の宝物といった地域には関係ないものを自慢として捉えていたが、検証後は、すべての児童が地域の施設や特産品、イベント等を理由付けて、紹介できるようになった（図 15）。これは、自ら示した興味・関心をもとに調べたい課題を決め、地域と結び付けた学習計画を立てたことが影響したと思われる。但し、まだ探究学習の前半部分であり、すべての探究活動を終えて達成される単元目標には到達していない。今後、課題解決に向け「情報収集」

「整理・分析」「まとめ・表現」「振り返り」の探究学習を継続することで、地域の自慢の根拠がより明らかになり、学びはより深まるものと考ええる。よって、現段階においては、地域の素材に触れたことで単元の目標である地域のよさに気づき、地域の自慢を紹介できる児童に迫りつつあると捉える。

以上のことから、地域素材を活かし、他者と協働的に学習する場の工夫を通じたことによって、主体的に課題に取り組み、地域に関わる児童が育成されたと考える。

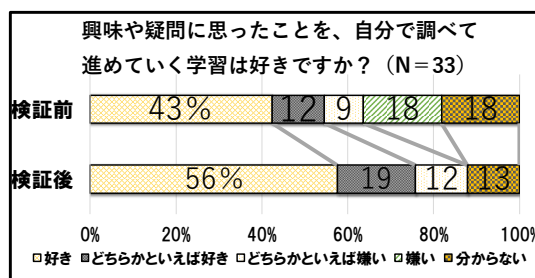


図 13 主体的に課題に取り組む学習に関するアンケート結果

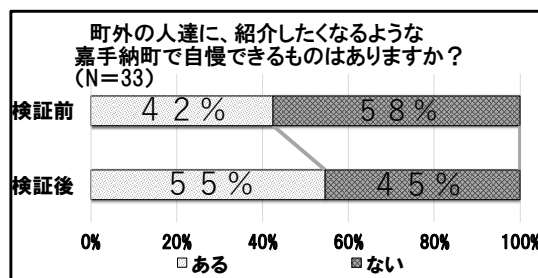


図 14 地域の自慢に関するアンケート結果

検証前 (5月)

自慢し、その理由を、おしえてください	自慢できる理由
親せき A さん	いとこだから
親せき B さん	
かんこくの人のせきゅうホール	おじいちゃんがいしあいをみにいったときとったおにぎりだから

検証後 (7月)

自慢し、その理由を、おしえてください	自慢できる理由
いももち	おきなほのひんごんのキャラクターだから
ウォーターガーデン	アールやすべりたいおもしろいからです
島々の日ゴサマ	ここでおねてしか聞けない島歌があるから

図 15 検証アンケート

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 地域素材の効果的な活用や、外部人材との適切な打合せを実施したことにより、児童の興味・関心が高まり、リアリティのある課題設定に向けての主体性を引き出し、地域に関わる姿を育成することができた。
- (2) 協働的な学習において、考えるための技法を積極的に活用したことで、協働的な学習の良さを感じながら多面的・多角的に思考を深め、地域の人との繋がりを意識した学習課題を設定でき、主体的に地域に関わり調べようとする児童を育成できた。

2 課題

- (1) 探究活動をより深めるために単元計画の見直しが必要であり、他教科との横断的な学習を念頭に置き、計画を立てる。
- (2) 児童の発達段階に応じた考えるための技法の選定が必要である。

〈参考文献〉

- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間』 東洋館出版
- 嘉手納町商工会かでな元気プロジェクト 『「かでな」は「面白い」がいっぱい！嘉手納のススメ』
- 黒上晴夫 2017 『平成29年度版 小学校 新学習指導要領ポイント総整理 総合的な学習の時間』 東洋館出版社
- 田村学 2017 『平成29年改訂 小学校教育課程実践講座 総合的な学習の時間』 ぎょうせい
- 田村学 2017 『平成29年度版 小学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編』 明治図書
- 四ヶ所清隆 2017 「日常生活や社会との関わりの重視」 田村学 2017 『平成29年度版 小学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編』 明治図書 30 - 31頁
- 鈴木登美代 2017 「地域教材，学習環境の活用」 田村学 2017 『平成29年度版 小学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編』 明治図書 72 - 75頁
- 三田大樹 2017 「探究課題の解決（地域の人々の暮らし，伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題）」田村学 2017 『平成29年度版 小学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編』 明治図書 34 - 35頁
- 田村学 2015 『授業を磨く』 東洋館出版社
- 文部科学省 2011 『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）』 教育出版

〈参考URL〉

嘉手納町ホームページ

<http://www.town.kadena.okinawa.jp/>

〈協力〉

琉球ドラゴンプロレスリング（講師 グルクンマスク）